

前田建設を知ってくれた皆様へ



RECRUIT



挑むのは、

前田建設工業

社会課題。

建てるだけでよかった

時代は終わり、

いまは次の一手が

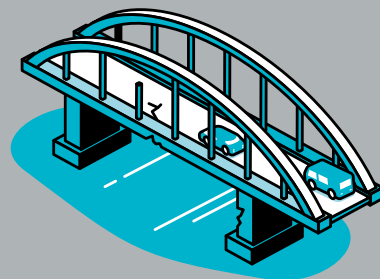
求められる時代。

高度経済成長期に

つくられたものの

老朽化が進んでいる。

橋、トンネル、河川管理施設（水門など）、下水道、港湾岸壁など暮らしを支えるインフラは、今後20年の間に建設後50年を経過する施設の割合が一気に高まります。国土交通省の調べによると、10年後の2033年には橋の約3割、トンネルの約4割、河川管理施設（水門など）の6割が老朽化への対応が必要に。



少子高齢化で自治体は
財源不足に。

公共インフラの維持が難しくなる。

働き手の人口が減少し自治体の税収が減ると、これまで自治体が税金で維持してきた公共インフラの整備がままなくなります。そのため、つくって終わりではなく、「パートナー」として伴走できるゼネコンに期待が集まっています。

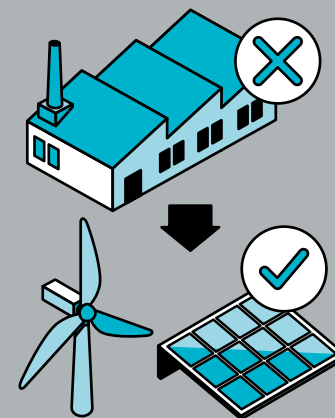


ゼネコンの海外進出。
日本のインフラは
誰が守る？

大手ゼネコンを中心に海外への進出が進む一方で、国内では社会インフラの老朽化や人口減少によるインフラ維持の困難という避けては通れない社会課題が待ち構えています。自国の課題から目をそらすことなく、使命感を持って挑むことも大切な企業の重要な役目だと私たちは考えます。

社会全体の
サステナビリティに
貢献できる
事業が求められる。

前田建設ではグループ全体で温室効果ガスの削減目標を掲げ、サプライチェーン全体のCO₂排出を抑制に取り組んでいます。また、電力関連の工事を数多く手がけてきた経験を活かし再生可能エネルギー事業を自社でも行うなど、「脱請負」の新規事業でも持続可能な社会の実現に貢献しています。



つくる、守る、企てる、実現する。

そのすべてを担う

総合インフラサービス企業へ。

前田建設が目指す 総合インフラサービス 企業とは？

私たちが目指すのは「エンジニアリング」と「サービス」を融合させること。身近なインフラにAIやIoTを活用しサービスを効率化することで、経済的、社会的負担の低減を図り、社会の持続性に貢献していきます。



インフラの未来に挑む
INFRAENGINEER
Holdings Inc.

東証プライム
2021年10月1日上場



自らが事業主になる 脱請負事業で新しい価値を創造する。

請負事業だけでは解決できないこの国の社会課題と対峙すべく、ゼネコンとしての強みを活かしながら自らが事業主としてビジネスを行う脱請負事業にも果敢に挑んでいます。「有料道路の維持管理と地域活性」「工業用水の事業運営」など公共性の高い事業に「事業主」としてすでに取り組んでいます。

挑戦できるのは、 確かな技術力があるから。



今から約104年前、山岳土木の会社として創業して以来、数え切れないほどの「日本初」の工事を請負い、その技術は今もなお継承されています。「青函トンネル」、「東京湾アクアライン」をはじめ、現在は、「リニア中央新幹線」に関わる工事も進行中。かつてない大きさのZOの開発にも挑むなど、土木にルーツを持つ企業としてその探究心はとどまることを知りません。

ベンチャー企業 との積極的な コラボレーション。

日本初の総合イノベーションプラットフォーム「ICI」では、建設業界に限定せず「建設×非建設」「非建設×非建設」の融合によって生まれる新たな価値を模索してベンチャー企業とコラボレーションを続けています。もちろん建設に関する基礎研究、最新技術の開発も。



MAEDAの強みを さらにチェック！



社員INTERVIEW

土木施工管理 松井 柚夏 2019年入社



「社会課題の解決」は請負事業の現場にもある。

私はいま鉄道を高架化する工事に携わっていますが、この高架化は交通渋滞の削減や、通学する子どもたちの安全を守ることにも繋がります。地域の方々からねぎらいの言葉をいただくこともしばしば。私たちの仕事は人の役に立つのだなあとうれしい気持ちになり、私が仕事に求めているのはこの充実感なのだと確信しました。

続きは
WEBで



土木施工管理 児安 匠平 2017年入社



若手に仕事を任せて経験を積ませる社風。

新東名高速道路を担当した時、初めて竣工検査を体験。竣工検査は工事終了時に不具合がないかを確認するための検査です。当時入社2年目の若手でしたが、検査書類のまとめを任せられ、アドバイスを受けながら乗り越えられたのはその後に自信につながっています。今は、工事全体を管理する監理技術者を目指したいと思っています。

続きは
WEBで



建築施工管理 岩佐 拓未 2009年入社



現場を大切にする社風が前田建設の強み。

いつも現場にいるから、何かあればすぐに声をかけてもらえるし、すぐ問題に対応できる。職人さんからは「現場にいてくれた方が話が早い」とよく言われます。そのとき、前田建設は現場に寄り添った仕事を重視するのが伝統なんだな、だから職人さんとの距離が近いんだと、あらためて気がつきました。

続きは
WEBで



機械 井澤 将晃 2014年入社



巨大シールドマシン開発で、この国のインフラに未来を。

周囲の友人が機械メーカーへと就職を決める中、私はどうしてもメーカーで働くことにしっくりきていませんでした。そんなときMAEDAに出会い、連れて行ってもらった現場見学で、今まで見たこともない巨大な機械が動いている様子にワクワクしたのを覚えています。今、前田建設史上最大のシールドマシンの開発に携わっています。

続きは
WEBで



設備施工管理 長屋 汐美 2017年入社



図面通りには進まない。だから私の存在価値がある。

設備施工の現場では、お施主さんをはじめ建築担当者、設備専門のサブコン、メーカーなど、多くの人との打ち合わせが必要になります。数えきれないほどの調整を経て、実際に建物を使ってもらえたときには大きなやりがいを感じます。一筋縄ではいなくても、一緒に目標に向かって知恵を出し合う一体感が私は好きですね。

続きは
WEBで



研究開発 樋口 優香 2013年入社



マスコンのプロとして大きな案件に挑戦する。

巨大ビルを支える地下の躯体を支えるマスコンクリート(マスコン)は、従来のコンクリート以上にひび割れが発生しやすくなるなど扱いが難しい技術。私が今メインで担当しているのはマスコン解析による現場の支援。マスコンの扱いはまだあまり知られていない技術だけに、そのノウハウをMAEDAの強みにするのが私のミッションです。

続きは
WEBで



土木技術 鶴巻 慎也 2018年入社



現場を知ることが新たな技術開発への第一歩。

土木技術の開発は、現場で何に困っているかを知ることから始まります。解決方法のアイデアを出し、様々な技術を持つ協力会社さんと一緒に一つの物をつくっていきます。そのプロセスは土木の現場と同じ。協力会社さんや作業員の方との意思の疎通がいい仕事につながります。現場での経験がリモートが中心になった今でも私を支えています。

続きは
WEBで



脱請負 竹下 麗歌 2017年入社



脱請負を推進する仕事。ビジネスをつくる楽しさ。

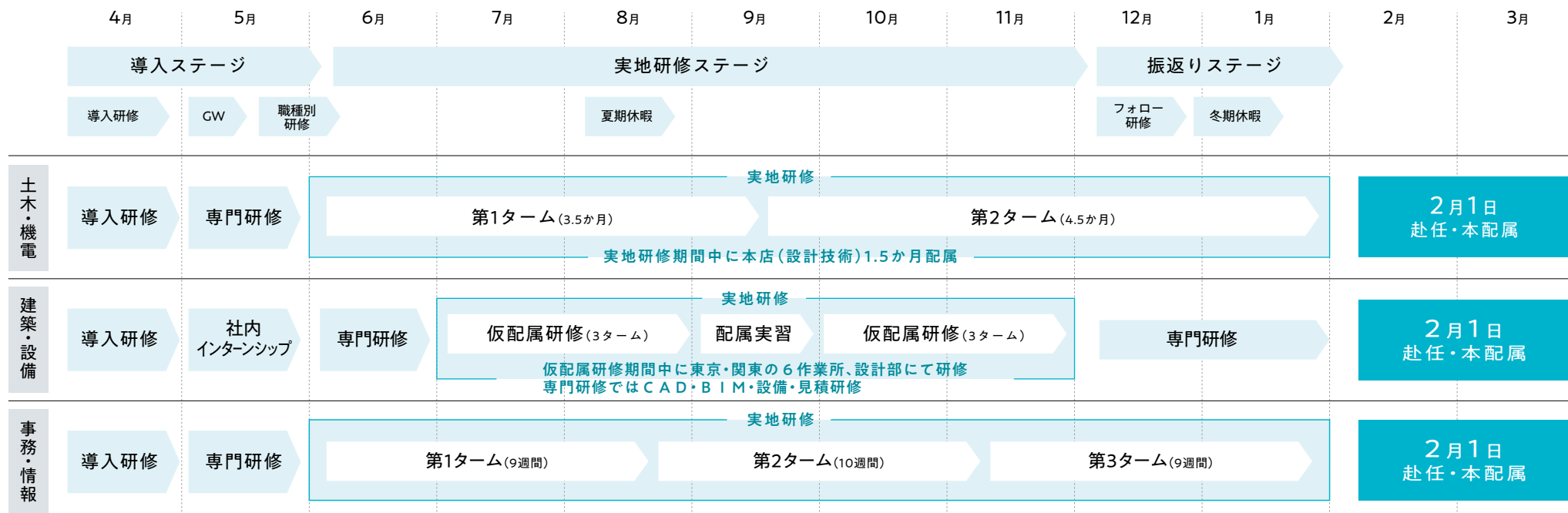
この1年、「三浦市公共下水道(東部処理区)運営事業」というコンセッションで優先交渉権を獲得するための準備に奔走してきました。私が担当したのはファイナンス。資金調達やコスト削減の方法などについて何百回もシミュレーションを繰り返し事業性を検証してきました。2022年7月に優先交渉権を獲得。新たな挑戦が始まります。

続きは
WEBで



キャリア形成と研修体系

入社後1年間を研修期間にあて、確実にキャリア形成の基礎を築きます。



福利厚生



多様な働き方・休み方を支援

令和4年10月に改正された育児介護休業法により“産後パパ育休”が創設されました。前田建設ではそれに加えて+20日の休暇を制度化。取得は必須としています。出産・育児と仕事との両立をサポートします。



介護と仕事の両立支援

介護休業制度・介護短時間勤務制度を整えているほか、仕事と生活の両立に向けて、介護に関する正しい知識と情報を得ることを目的として、2016年より本支店で「介護に関するセミナー」を開催しています。



女性活躍推進

女性活躍推進に向け、厚生労働省認定(通称:えるぼし)の「2段階」を取得。また不妊治療費用の貸付やフレキシブルワーク・スマートワークなど様々な制度を充実させ、家庭と仕事の両立を支援しています。

MAEDAの軌跡

東洋No.1のダム、世界No.1の海底トンネル、国内No.1の高層マンション…1919年の創業以来、前田建設は時代のニーズに応える挑戦を続け、幾多の「No.1」を成し遂げてきました。創業100周年を経て、私たちはこれまでの歴史を継承し乗り越え、新たな「No.1」への挑戦を始めます。

1919



前田の挑戦は山岳土木から

土木事業で身を立てるという志で飛島組の門をくぐった、創業者初代前田又兵衛。1919年(大正8年)1月8日、福井県小和清水の地で、飛島組「前田事務所」として創業しました。これが、前田建設100年の歴史の始まりです。

1980



公共工事から民間工事へ

公共工事から始まった建築事業は、1980年代には民間工事へと本格進出。光が丘IMA、牛久駅西口地区第一種市街地再開発事業など、工場、集合住宅や商業施設へと展開していきました。

1960

都市土木での新たな挑戦

1951年(昭和26年)の営団地下鉄丸ノ内線工事から始まった都心での大型土木工事の成功から、1960年以降、前田は東海道新幹線国府津工区工事、名神高速道路茨木工区工事など主要都市をつなぐ鉄道やトンネルの整備を担うようになります。



2013



脱請負を掲げ未来へ挑戦を続ける前田

21世紀からは従来の「請負」のみのビジネスモデルから、請負の範囲を超え、建設業自らが企画・計画、設計、建設、運営・維持管理、点検・補修まで、上流から下流のすべてを担う、未来の建設会社として「脱請負」へ歩み始めました。前田の新たな挑戦は続いています。

次の100年へ

2000

高層建造物への挑戦

技術開発を進めた前田は21世紀を迎え、次なるステージへと成長していきました。2003年(平成15年)、横浜みなとみらい地区に免震装置を備えた高さ100メートルの高層マンションM.M.TOWERSを建設。さらに2008年(平成20年)には、勝どきの再開発事業として、国内最高階層となる200メートルのツインタワーマンションTHE TOKYO TOWERSを竣工しました。



あくなき挑戦と、 社会課題の解決。 新しい姿のゼネコンとして 未来に価値を創る。

前田建設工業株式会社 / 代表取締役社長
前田 操治

**100年間挑戦してきた。
だからまた、次の時代に挑戦できる。**

ゼネコンは今、大きな転換点にいます。インフラ整備という社会的使命は老朽化への対応という新たなステージに入り、少子高齢社会のなかで財源も建設業の担い手も十分とは言えません。一方でDXの推進やICTといった新しい技術の活用も求められています。いずれも私たちに突き付けられた難しい課題です。けれど、前田建設には100年以上変わることのない「挑戦する文化」があります。いつの時代も堅固な壁に挑戦し、次々と乗り越えてきた歴史があります。今もまた、私たちはワクワクする気持ちで目の前の壁に挑んでいます。

**健全な危機感が未来につながる。
いち早く目指してきた新しい建設業の姿。**

壁と対峙したときに取るべき態度とは？それは、恐れではなく健全な危機感を持つことです。10年以上前に、いち早く現在の建設業を予見した前田建設は、施工だけでなくその上流(ファイナンス・企画・計画)や下流(運営・維持管理)までを事業対象とする「脱請負」と、事業を通して社会課題を解決していく「CSV(Creating Shared Value: 共有価値の創造)」という2つの未来を目指しました。そして、そのビジョンは「総合インフラサービス企業」という企業像となって具現化されようとしています。

**好奇心こそ最強の伸びしろ。
建設業の枠を超えて知見を広げよう。**

私たちのビジョンを支える最重要の基盤は、建設業としての技術やノウハウです。そのクオリティには自信を持っていますが、脱請負もCSVも前田建設だけで実現できるものではありません。そこで、オープンイノベーションの考え方を導入して、業種を超えた企業ネットワークや行政、研究機関などとの連携を進めています。これまでの建設業では出会えなかったさまざまな人や課題と向き合いながら成長していく。それは、前田建設で仕事をする大きな魅力の一つです。森羅万象に興味ที่尽きない、旺盛な好奇心の持ち主を求めています。

**今は、変わらないことが一番のリスク。
チャレンジする面白さを共に。**

初めにも述べたように、時代は急速に変化しようとしています。私たちは身を潜めて嵐が通り過ぎるのを待つのではなく、時代の風を受けて前進することこそ賢明な判断だと考え、周到に準備を重ねてきました。また私たちは創業以来、「挑戦する文化」とともに「人を育む文化」をDNAとして受け継いできました。仲間とともに未来を拓く力を育み、どこにもなかった新しい建設業の構築に向けて、一緒にチャレンジしていきましょう。

